

The Historical Change of Chinese Demonstrative Pronouns : Dialectal and Philological Approaches

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/42247

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



学 位 論 文 要 旨

Dissertation Abstract

学位請求論文題名 Dissertation Title

漢語指示代名詞の歴史的変遷 — 現代方言と文献からのアプローチ

(和訳または英訳) Japanese or English Translation

The Historical Change of Chinese Demonstrative Pronouns :
Dialectal and Philological Approaches

人間社会環境学 専攻 (Division)

氏 名 (Name) 陳 怡 君

主任指導教員氏名 (Primary Supervisor) 岩田 礼

(注) 学位論文要旨の表紙

Note: This is the cover page of the dissertation abstract.

Summary

This thesis studies the historical change of Chinese demonstrative pronouns. It consists of four chapters.

The first chapter introduces the motivation, the purpose and methodology of this study.

The second chapter focuses on philological evidence of Chinese demonstrative pronouns in a diachronic perspective. Several classical texts, which represent the linguistic characteristics of Old and Middle Chinese, are surveyed, and we analyze the usage of demonstrative pronouns appearing in these texts.

The third Chapter focuses on dialectal evidence of demonstrative pronouns based on the assumption that historical changes are reflected in the geographical distribution of synchronic forms. Since demonstrative pronouns are much diversified in terms of their forms, we classify and map them according to a consonant based analysis. Through observing the maps, we conclude that the oldest type was “T(proximal) - K(distal)”, which later underwent the following changes : 1) T-K/TS-K > K-K > K-N ; 2) T-K/K-K > Ø-K ; 3) T-K/K-K/Ø-K > N-K. These changes may have been motivated by the grammaticalization of numerals and classifiers as well as by analogy and homonymic collision, while some changes may have been triggered by the external influence of the northern types.

The fourth chapter summarizes the whole descriptions and analyses.

本研究は漢語の指示代名詞の歴史的変遷について、古代文献の考察及び方言の地理的分布の観察によって解明を試みたものである。

上古文献における指示代名詞の種類は多く、近称は「之」、「此」、「茲」「是」「斯」「時」「惟」「爾」「若」などがあり、遠称は「其」「厥」「彼」「夫」などがある。中古に至って、さらに新たな指示代名詞が現れた。しかし、近代以後の文献では、「這」－「那」という体系だけである。このような状況で、文献だけ見れば変化の連続性が中断されるように見えるので、現在でも様々な説があり、その変化の過程はまだ明らかにしていない。

指示代名詞は事物、場所、方角などを指し示すのに用いられる基本語彙である。人の主観にかかわる空間感覚を表すため、よく認知、語用の研究対象とされている。一方、指示代名詞は文脈或いは会話現場の情報に依存性が高いため、文献に現れる指示代名詞の意味を正確に捉えることは容易ではない。文献だけに頼り、指示代名詞の歴史を求めることは、その変遷の全貌を窺う上で限界がある。

現代方言の豊富な資料は、従来の研究が十分に明らかにしていない諸問題を解明することに貢献できると期待される。本研究は文献を分析した上で、さらに、言語地理学の方法によって指示代名詞の歴史を解明することを目指した。本論文は四章によって構成される。第一章は研究の動機、目的、研究方法及び漢語の指示詞について紹介した。中核部分は第二章と第三章である。第四章は結論である。

以下に、本研究で論じた内容を「各章の要約」及び「結論」において総括し、さらに今後の課題を示したい。

1. 各章の要約

本研究は四つの章から構成された。

第一章は研究の動機、目的、アプローチ及び漢語の指示詞について紹介した。

第二章は上古、中古前期、中古後期の三期について、それぞれの文献を考察した。上古については、《尚書》、《論語》、《莊子》の三文献を取り上げた。この三文献で、使用頻度が高とも高い近称－遠称のペアは「之」－「其」である。上古において、「之」－「其」は遠近関係を表すほか、照応的な機能を持っている。中古の文献としては、《世説新語》及び仏典四種（《六度集經》、《生經》、《百喻經》、《賢愚經》）を考察した。これらの文献では会話を記述する場面が多く、口語用語が多いため、中古時代の口語の特色を反映していると考えられる。中古になって、「之」は修飾語としての指示的機能がなくなり、照応関係を表す目的語としてのみ使われている。「其」は上古の用法が中古時代でも継承される。中古における「之」「其」は、照応関係を表す時、遠近関係が中立的になる傾向がある。中古で注目されるのは「爾」の変化である。「爾」は上古で指示代名詞（近称代名詞）としても使われたが、頻度は低く（例えば《論語》では 22 例中 2 例）、人称代名詞（二人称代名詞）として使われる頻度の方が高い（《論語》では 22 例中 13 例）。中古になって変化が現れた。それは「爾」が遠称代名詞として頻繁に用いられるようになったこと（四仏典では 1063 例中 564 例）、それと連動して二人称代名詞として使われる頻度が低くなったことである。

中古から近代の過渡期の資料として中古後期の《敦煌變文》を取り上げた。この時期の最も大きな変化は「這」及び「那」が指示代名詞として現れたことであり、先行研究では唐詩などでも使われていることが指摘されている。《敦煌變文》では、「這」は近称代名詞として用いられているが、「那」の用例は多くが「どれ」または「なんぞ」という意味であり、遠称代名詞として使われる例は少ない。遠称代名詞の「那」は「這」と対比して用いられている。一方、《敦煌變文》では中古期と同様に「爾」が遠称代名詞として使われる頻度が高い。「那」と「爾」はいずれも鼻音声母の N 音類であり、遠称代名詞は、上古の牙喉音類（其、厥など）・唇音類（彼など）から N 音類に変化したことがわかる。この変化の原因は次のように考えられる。まず、牙喉音類の「其」は中古期に遠近関係が中立的になり、唇音類の「彼」は疎外の感情が含んでおり、口語では疎外、軽蔑な感情を表す場合しか使われなかった。故に、遠近関係を表すことができ、また感情表現にも無標的(unmarked)な遠称代名詞を求めざるをえなかったのであろう。その際、もともと二人称代名詞としても用いられる N 音類の「爾」は新たな遠称代名詞に相応しいものであった。こうして、「爾」が中古時代に遠称代名詞としての頻度が高くなった。それに連動して指示代名詞の「爾」に何か特殊な変化が起きたものかと考えられる。例えば、上古で二人称代名詞として常用された「爾」は、中古になって遠称代名詞として使われるようになったために、二つの用法を区別するため、韻母が i から a に変わった。この変化が完了すると、「爾」の語源が忘れ去られて文字の上は「那」で表すようになった。この仮説はそれを証明する証拠が不足しているが、もしそれが正しければ、「這」の語源も推定できるかもしれない。志村良治 (1984) は「這」の発音は中古で tɕa と推定している。その韻母の a はおそらく中古で遠称代名詞として使われ、発音が na になった段階の「爾」に類推したと考える。そして、中古声母 tɕ- は上古の *t-/*t- に由来するのであるから、「這」の語源は上古で t- 声母を有した「之」である可能性がある。

第三章では方言分布に基づいて、指示代名詞の歴史的変遷を推定し、さらに変化の成因を明らかにした。近称、遠称の地図のほか、両者を組み合わせた類型地図を作製した。各地図は、指示代名詞の第一成分の声母に基づいて作成し、その分布状況によって変化の過程を推定した。

近称の地図によって、全体として、牙喉音類が舌歯音類に取り囲まれるように周圏分布が見られる。この分布状況から、近称としては舌歯音類が古い語形と推定する。遠称の地図には、おおよそ北方の N 音類と南方の牙喉音類との南方対立が見られる。類型地図の〔地図 III〕では、北方の「TS-N」と南方の「T-K」「TS-K」「N-K」「Ø-K」などの類型という南北対立である。この分布状況だけからは、北方の N 音類と南方の牙喉音類のどちらが古いのが判断し難いが、文献によれば遠称の N 音類の出現は中古以降であることから、上古から存在していた牙喉音類の遠称代名詞が古い類型であると考えられる。そこで、最も古い指示代名詞の類型は「近称：舌歯音類－遠称：牙喉音類」であり、中古に至って遠称が N 音類に変化したものと考えられる。中古以後の文献が反映する遠称代名詞の多数が「爾」「那」などの N 音類であるのは、それらの文献が北方方言を反映し、南方方言を反映することが少ないためであろう。地図が示す状況は、中古以後、北方、南方それぞれで変化が進行してきたことを反映していると考えられる。

このように、北方の「TS-N」は新たな類型である。一方、南方では、「T-K」、「TS-K」、「N-K」、「Ø-K」などの K 類の遠称が複雑な分布をしている。第三章では、これらの類型の変化の原因と過程も明らかにした。

上で、方言分布から推定される最も古い指示代名詞の類型は「近称：舌歯音類－遠称：牙喉音類」と述べた。この類型を文献と対照すれば、中古以前の T 類声母近称「之」/TS 類声母近称「是」「茲」「此」「斯」－K 類声母遠称「其」「箇（個）」のような類型である。「T-K」類の T は上古の「之」（上古音再構音 *ʈiə*，平声）に遡る可能性があるが、南方方言における T 類近称の声調は上声多いことから（第三章 表 8 を参照）、その T は中古文献に現れる「底」（中古音再構音 *tiei*，上声）に由来する可能性もある。以上のことから、南方方言における「T-K」/「TS-K」類が古いと推定した。他の類型はこの二つの類型から変化したと考えられる。

(1) T-K/TS-K > K-K > K-N

(2) T-K/K-K > Ø-K

(3) T-K/K-K/Ø-K > N-K

変化 (3) T-K/K-K/Ø-K > N-K は地理的分布状況により、N-K が新しい類型であると推定したが、その変化の原因についてはなお議論の余地がある。他の変化には次の要因が関与していると考えられる。

(1) 文法化の発生

(2) 同音衝突の影響

(3) 方言接触の影響

要因 (1) は変化 (1) の前半 (T-K/TS-K > K-K) と変化 (2) を説明する。T-K/TS-K > K-K という変化した原因は、K 声母を有する量詞「箇（個）」が文法化して指示代名詞になったことである。変化 (2) (T-K/K-K > Ø-K) が発生した原因は、零声母の数詞「一」が文法化して近称代名詞になったためである。数詞、量詞の文法化が南方方言における指示

代名詞の変化に大きな影響を与えることが分かった。筆者が収集した方言データでは、このような文法化は北方方言ではまだ発見されていない。

要因 (2) は「K-K」類型の成立に伴う変化を説明する。文法化して、近称と遠称が同じく K 類声母なった方言は同音衝突を避けるために声調または韻母を変えたのである。

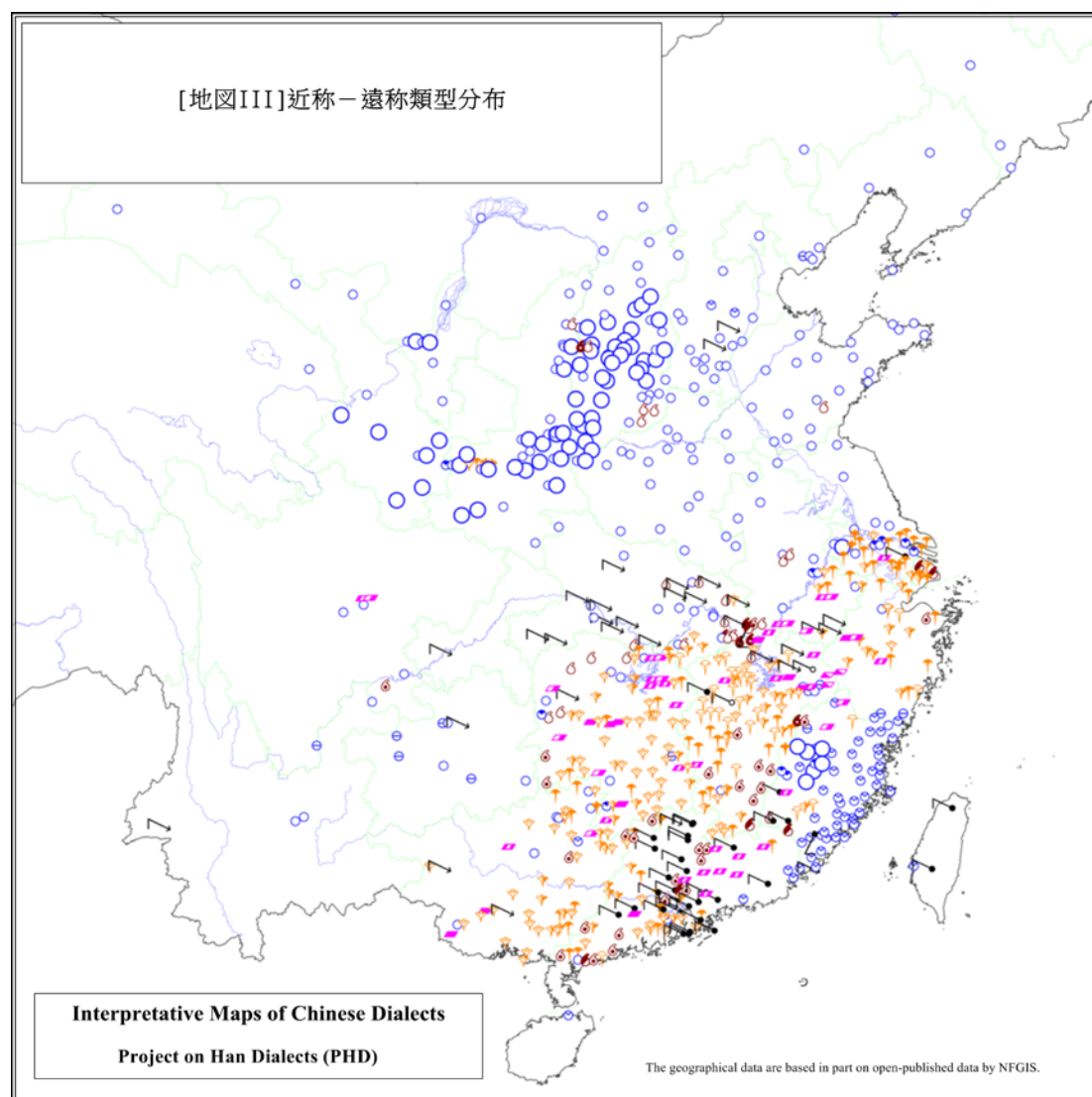
要因 (3) は変化 (1) の後半 (K-K>K-N) を説明する。南方地域の西北外縁では「K-N」類が分布している。その地域はおそらく北方方言「TS-N」類と接触し、N 類遠称を受け入れたと考えられる。

2. 結論

上古で最も頻度が高い指示代名詞のペア「之」-「其」は、中古になると指示機能がかわるか遠近関係が中立化したために、変化が始まった。中古期の顕著な特徴として、「爾」が遠称代名詞として使われる頻度が飛躍的に高くなり、唐代になると「那」が現れた。このことは「爾」と「那」の同源関係を暗示している。(以上第二章)

現代方言の地理的分布から、南方方言における指示代名詞の類型の変遷を明らかになった。その変化には量詞、数詞の文法化が重要な影響を与えた。また、近称と遠称の相互的類推、同音衝突の回避、方言接触も変化に影響を与えた要因である。これらの要因はいずれも指示代名詞に不規則音韻変化を生起させた。これは従来の文献に頼った分析では解明できない新たな知見である。(以上第三章)

最後に、今後の課題として次のものがある。まず、山西省及び福建省北部に遠隔分布する「兀」系遠称。これをどのように扱うかが指示代名詞の歴史的変遷の推定にも大きな意味をもつ。次に、K 類指示代名詞の広範囲分布状況によって、中古時代における「箇」が量詞から指示代名詞へと文法化したスピードはかなり速かったと推定される。このような文法化が具体的にどのような過程で進行していったか、これも今後の課題である。



A. 近称舌齒音類 TS($\text{tʃ}/\text{tʃ}/\text{tʃ}/\text{ts}/\text{dʒ}/\text{z}$) - 遠称音類

- A-1: TS-N($\text{n}/\text{n}/\text{l}$)
- A-2-1: TS-K($\text{g}/\text{k}/\text{ŋ}$)
- A-2-2: TS-H(x/h)
- A-3: TS-U(v/u)
- ⊖ A-4: TS-その他 ($\emptyset/\text{T}/\text{TS}/\text{P}$)

B. 近称舌齒音類 T(t/d) - 遠称音類

- B-1: T-N($\text{n}/\text{n}/\text{l}$)
- B-2-1: T-K($\text{k}/\text{ŋ}$)
- B-3: T-U(u)
- B-4: T-その他 ($\emptyset/\text{T}/\text{TS}$)

C. 近称 N 音類 ($\text{n}/\text{n}/\text{l}$) - 遠称音類

- ↗ C-1: N-N($\text{n}/\text{n}/\text{l}$)
- ↘ C-2-1: N-K(k)

- ↖ C-2-2: N-H(x/h)

- ↗ C-3: N-U(u)

D. 近称牙喉音類 K($\text{k}/\text{g}/\text{h}$) - 遠称音類

- ◇ D-1: K-N($\text{n}/\text{n}/\text{l}$)
- ↑ D-2-1: K-K($\text{g}/\text{k}/\text{ŋ}$)
- ↑ D-2-2: K-H(x/h)
- ↑ D-3: K-U(v/u)
- ◇ D-4: K-その他 ($\emptyset/\text{T}/\text{TS}/\text{P}$)

E. 近称零声母音類 $\emptyset$ - 遠称音類

- ▮ E-1: $\emptyset$ -N(n/l)
- ▮ E-2-1: $\emptyset$ -K($\text{k}/\text{ŋ}$)
- ▮ E-2-2: $\emptyset$ -H(x)
- ▮ E-3: $\emptyset$ -その他 ($\emptyset/\text{T}/\text{TS}/\text{P}$)

学位論文審査報告書

平成27年 1月 29日

1 論文提出者

金沢大学大学院人間社会環境研究科

専攻 人間社会環境専攻

氏名 陳 怡君

2 学位論文題目（外国語の場合は、和訳を付記すること。）

漢語指示代名詞の歴史的変遷—現代方言と文献からのアプローチ

3 審査結果

判定（いずれかに○印） 合格 ・ 不合格

授与学位（いずれかに○印） 博士（社会環境学・文学・法学・経済学・学術）

4 学位論文審査委員

委員長 岩田 礼 印

委員 大滝 幸子

委員 新田 哲夫

委員 高山 知明

委員 上田 望

委員 遠藤雅裕（中央大学法学部・教授）

（学位論文審査委員全員の審査により判定した。）

5 論文審査の結果の要旨

本論文は中国語の指示代名詞について、上古から現代方言に至る歴史的変遷を文献資料と現代方言双方からのアプローチによって解明しようとしたものである。論文の主要部分は、二章から成っており、前半は文献資料の言語学的分析、後半は現代方言に基づく言語地理学的解釈と語法分析を主たる内容とする。

中国語文法の歴史的研究は、我が国の太田辰夫、志村良治に代表される分厚い文献研究の蓄積があるが、指示代名詞については、未解明の部分が少なくない。一つの大きな問題は、上古から中古前期にかけて近称、遠称のいずれでも多数の形式の併存状態が続くが、中古末期以降の北方中国語で近称「這」／遠称「那」というシンプルな体系に転換する、この断絶とも呼べる転換の原因とプロセスが未だ定説をみていない。この問題について、筆者はまず各時代を代表する文献資料を丹念に読み込む作業から着手した。指示代名詞は文脈依存性、現場依存性が高いため、この作業は高度な閲読能力を必要とする。作業の結果、筆者は、上古における方言差異の存在といった従来も指摘されていた知見を確認しただけでなく、中古期に生まれた変化のモチベーションを指摘した。即ち、上古において多用される近称の「之」と遠称の「其」は、前者が目的語、後者が修飾語という機能分担の傾向があり、また双方とも照応的(anaphoric)な機能も有したのであるが、中古期に照応的な機能が強化され、遠近対立の表示については非関与的な傾向を強めた。また、もう一つの遠称代名詞「彼」は用法が限定されていた。そこで、遠近の対立を言語形式の上で確保するため、上古から一部で用いられていた「爾」が遠称として用いられるようになった。筆者の調査によれば、「爾」は修飾語的用法に限定されるものの、中古期の『世説新語』や仏典での使用例は飛躍的に増加し、その後の『敦煌變文』に至って同じく修飾語としての「那」が登場する。「那」と「爾」は語頭子音も同一であることから、筆者は現代北方中国語が「那」は「爾」に由来すると結論した。一方、近称の「這」は、上古の「之」に由来し、「爾」の母音が $i \rightarrow a$ と変化したのに類推して、その母音は $i \rightarrow ia$ と変化したと推定する。「這」と「那」の語源に関するこの結論は、それ自体先行研究にもみられるが、筆者の見解は指示代名詞の用法調査に基づく独自の仮説となっている。

次に、現代方言からのアプローチについては、まず中国全土を対象に既刊の方言資料を網羅的に調査し、その結果を3枚の全国地図として提示した。中国語の指示代名詞は不規則音韻変化を蒙ることが多く、極めて多数の形式が存在するが、筆者は、語頭子音が変化の上で安定する傾向にあることを見出し、近称、遠称それぞれについて語頭子音の類に拠るシンプルな分類

を提示した。また、近称、遠称の変化は連動するため、それらを統合した体系地図を作製した。次に、地図上に可視化され指示代名詞について、特に南方方言で生起した一連の変化をめぐって考察を加えている。本論文で最も高く評価されるのはこの部分である。まず、文献的知見もふまえながら、語頭子音が近称 TS,T/遠称 K であるものを最も古い体系として措定した。次に、南方、特に東南地域の方言で生起した下記の変化について考察した。

- 1) 近称 TS,T/遠称 K > 近称 K/遠称 K
- 2) 近称 TS,T or 近称 K/遠称 K > 近称 Ø/遠称 K (Ø は母音始まり)
- 3) 近称 K/遠称 K > 近称 K/遠称 N

1) と 2) の変化については、量詞又は数詞の文法化に因るものと指摘している。即ち、1) については汎用量詞「箇」、2) については数詞の「一」が文法化して、指示代名詞となったものである。“不定”であるべき量詞や数詞がなぜ“定”である指示代名詞になったかと言えば、「構造が意味を与える」、すなわち主語の位置にある語は一般に「定」の性格を有するためである。このような文法化のメカニズムは従来も指摘されているが、先行研究は個別方言の事例に関する指摘にとどまり、面を有する方言分布について丹念に説明して見せたのは筆者が初めてである。1) の変化の結果生まれた近称 K/遠称 K のような体系は、同音状態に陥りやすいが、母音や声調を変えることによって同音衝突を回避している。また、3) の変化については、変化の結果生まれた近称 K/遠称 N が、北方系の近称 TS/遠称 N と隣接して分布することから、隣接する官話系方言の影響に因るものと推定している。このように、本論文は言語地理学と文法化の双方から総合的な考察を加え、複雑な現象を合理的に説明することに成功している。

本論文については、中国語方言文法の研究で顕著な業績のある中央大学の遠藤雅裕教授を外部審査委員として委嘱し、論文審査報告書を寄せていただいた。遠藤教授は論文の内容を的確にまとめた上で、「上述のような研究成果は実証的であり、高く評価できる」とされている。しかし、同時に本論文の問題点も指摘している。それらは、変化の原因、プロセス、結果に関わる概念の明確化、筆者が提示する仮説とは異なる可能性の追求、などに関わる。委員会では、さらに文献テキストのチェックに周到さが必要なこと、また仮説に今後補強すべき点がいくつかあることなどが指摘された。しかし筆者は大きな研究テーマに立ち向かい、膨大な作業の基礎の上に、国際的な評価にもたえうる視点と仮説を提示している。因って、審査委員全員の一致を以て、博士学位論文として申し分ないものと判断したので、ここに報告する。